

初旅

三好十郎

輝夫 春子 中年の男 連れの男 女学生 青十年 三十の女 検札 傷病者 娘 一 二 三

〃 四

中年男

中年女

その夫（中老）

老人

茶店女

叔父の声

（大きな駅の構内の騒音）

輝夫 さ、これでよしと。背中がゴリゴリするんじゃない、ここじや？ こつちがいいかな？  
代ろうか？

春子 いいんですの。

輝夫 この列車で四時間、それから支線に乗りかえて二時間、都合六時間坐つてなきやならない  
んだから——いつそ二等にかわろうか？

春子 いいえ、これでいいの。割に空いているし、それに——三倍近くのお金払うの、もつた  
ないわ。

輝夫 だつて君と僕とは、これが初めて一緒に旅行するんだよ。そして、つまり、一生忘れるこ

との出来ない旅行になる。そうだろ？

春子 ええ。

輝夫 だからさ、せめて二等に乗るくらい——

春子 だから、だから私は三等で行きたいんですもの。お金のことだけじゃ無いの。

輝夫 だからさ、だから、僕は一等にでも春さんに乗せて行きたいんだ。

春子 でも、フフ、一等に乗って小さくなつてオニギリかなんかかじつてるの、ヘンじゃない？

輝夫 フフ、そりやまあ、そうだけど、僕の言うのはさ——あ、しまった！ うっかりしていた

！

春子 なあに？

輝夫 オニギリで思い出した。ええと——そうだ駅の売店にあるかな？ よし、ちよつと僕買つ

て来るからね。（立つ）

春子 なんですの？ だつて、もう直ぐ発車するんじゃない？

（駅の雑音の中から遠くベルが鳴っている。それと、この車室に乗りこんでくる乗客たちの足音や荷物を棚にのせる音や切れ切れの言葉など）

輝夫 まだ二三分はある。サンドイッチ。いや、買うには買ったけど、春さんの好きな野菜サラダを朧忘れしていた。

春子 いいのよ、いいのよ、私なら。乗りおくれたら、どうしますの？

輝夫 大丈夫、大丈夫（ガタ／＼と道路を出口の方へ小走りに去る）  
春子 輝夫さん、よして！ あの――

（近くの席が次第に一杯になつてくる気配）

中年の男 （すこし離れたところで） やれやれ、やつと間に合つた。

連れの男 （重いカバンを棚の上へのせながら） なにしろ、これに乗りおくれて次ぎの一時のにならと、向うに着くと日が暮れるんですからねえ。ま、よかつた。

女学生 （かなり遠い所で叫んでいる） ヤマちやあん！ こつちよ！ こつち、こつち！ ハバ、ハバツ！

青年 （別の離れたところで） へつ、なによウクソ！ （ガタンと箱のようなものを床に投げ出した音） 虫のせいやカンのせいでカツギ屋やつてんじや無えんだ。みんなこの、食えさえすりや、お前…… （あとは雑音に消される）

（ゴトゴト下駄の音が近づいて）

三十女 さあさ！ ここが空いてら。早く坐れ、鉄！ やれ、どつこいしよ。

男の子 ここじや、外が見えねえよ。

三十女 そいじや、そつちの窓のそばへ行け。（抱かれた乳呑み手がむずかる声） おおよしよし。

よしよし。

春子 あのうち——

男の子 （窓をガタガタやりながら）お母ちゃん、このガラスあげて！

三十女 なんだよ？

春子 あの、そこはいるんですけど、ちよつと、あの——

三十女 はあ？

春子 いえ、私の連れが、あの、すぐに来るんですけど——

三十女 （申しわけだけの、気の無い調子で）鉄、そこは誰か来るんだとよ。おおよろしく。それら！ （乳呑み子の世話にかかつて、春子を相手にしない）

（遠くで発車の号笛）

男の子 ほら、もう出るぞ！ （列車動き出す。その音。靴音がして輝天が通路を急いで戻つて来る）

輝夫 （ハアハア言いながら）有った有った、ほら！

春子 ああ、輝夫さん、乗り遅れたのかと思つた。わざく／＼サンドイツチのために——よかつたのに。

輝夫 サンドイツチのためじや無い、君のためさ、ハハ。ええと、どうしたの、ここ？ 君、ちよつと——

春子 私、そう言つたんですけど——

三十女 なんしろ子供だもんで、外う見たがつて。

輝夫 最初から僕がいたんです。どいて下さい。

春子 いいじゃありませんの。じゃ私がこつちへ来るから輝夫さんここへ坐つて。

輝夫 だつて春さん窓のそばが好きなんだろう？ そんな——どけよ君。

春子 いいのよ、いいのよ、私はここでいいの。

輝夫 チツ。(不快そうに) いや、僕はいいんだ、春さんさえよけりや。(坐る)

三十女 鉄、靴う、ぬぐだあ！

(列車の走る音)

輝夫 (なるべく他に聞かれぬよう、春子だけに話しかける話し方で。以下、春子の方も同様)

……寒くは無い？

春子 ううん。

輝夫 なんだか顔色が少し青い。

春子 そうかしら。この黒い服のせいで、そう見えるんでしょ。

輝夫 そう言えばそうかな。どうして、しかし、黒い服なぞ着て来たの？

春子 あたし今日はこれが着て来たかつたの、輝夫さん、きれい？

輝夫 きらいじゃ無い。しかし何だか礼拝みたいで堅くなつてるような——

春子 堅くなつてゐるかも知れない。服のせいじゃ無くつて、私が――

輝夫 へえ、どうして？

春子 すこし怖い。

輝夫 怖い？ なにが？ 僕と一緒に旅行するのが？

春子 ううん、そんな――

輝夫 じゃ叔父に逢うのが？ だつて僕の叔父なんて、ただ人の良い、山ん中の百姓に過ぎない。それに君との事は手紙で言つてやつて叔父もよろこんで来ているんだもの。ただ僕には父も母も無し、肉親と言つてはあの叔父一人きりしか無いんで、君との事をハツキリ決める前に叔父にだけは逢つといてほしいと思つて、こうして行くだけなんだから。逢つて一目見れば、そんな

春子 いえ、それよりもね、旅行そのものが怖い。だつて、私、学校時分、修学旅行で日光に行つたのと、姉さんと御殿場に一度行つたきりで、あと、どこへも行つたこと無いんですもの。なんかしら――

輝夫 いや、そういえば女学校時代、方々旅行でもしようという時分は戦争中だつたんだな。

春子 それだけじゃ無いの。そのほかのことでも私、まだなんにも知らないのよ。ホントになんにも知らない。輝夫さん今にびつくりなさるわ。このさきチャンとやつて行けるか私、心細くなる。

輝夫 そんなことは無い。人生は手習い草紙に字を書くのとは違ふ。次ぎ／＼と言わば冒険だもの。ウブに新鮮にびつくりしたり、考えたり――それを二人連れでやつて行きやいと僕は思う

んだ。だろう？

春子 ええ。……姉さんから、あんまり大事に、大事に、荒い風にも当てないように私育てられ過ぎたのね。それ思うと姉さんがうらめしくなる事があるの。

輝夫 ハハ、僕はその点、君のお姉さんにお礼を言うなあ。風にも当てなかつた玉みたいなものをソツクリ僕に渡してくださろうというんだから。

春子 まあ！

輝夫 ほら、やつと赤くなつた！ ハハ、ほら！

春子 知らない！ そんな――

輝夫 だつて、そうじゃないの、そう思うと僕はね――

三十女 あのう、藤岡までは、なん時間ぐらいかかるでしょうかね？

輝夫 え、藤岡？

三十女 へえ。

輝夫 さあ。そういう駅があつたかなあ、この線に。よくわかりませんねえ。

三十女 そこから又、三里も歩いて行かなきゃならんとこでしてね。途中で日が暮れたりしたら、フロントに困つちまう。（相手に責任でもあるようにツケツケ言う）

男の子 母ちゃん、なんか、おくれ。

三十女 千住出る時、めし食つたでねえか。

輝夫 ……うつかりしてた、そろそろ一時だ。春さん、おなかが空いたろ？ これ食べよう。



(サンドイツチの包みをあける紙の音)

春子 おべんとうも出しましたようか？

輝夫 それは夕飯にした方が、よかかない？ もつとも君がそうしたきや——

春子 いえ、私はサンドイツチの方がいいの。

輝夫 じゃ、はい、こつちが野菜サラダの。魔法びんに紅茶がはいつてる。(食べはじめる) つ  
いだけようか？

春子 (これも食べはじめながら) ……ええ、あとで。

男の子 母ちゃん、なんか。… (返事無し) よう！

三十女 なんにも無えよ。馬鹿。

輝夫 (物を噛みつゝ窓外を向き) そろそろ山が近くなる。

春子 綺麗ね、色が。どの辺かしら、あれ？

輝夫 そうきな——

男の子 (泣き声で) 腹あへつたよ、母ちゃん。なんかよう——

三十女 (いきなりピシヤリと、男の子の頭をなぐつて) 阿呆！

春子 (見かねて、サンドイツチを取つて差し出す) あ、これどうぞ。

三十女 へ？

春子 お食べなさい、どうぞ。

三十女 すみませんですわねえ！ ほら、鉄、いただくだよ。ちやんとお辞儀して、へへ、いえ、

ホンのさつき腹一杯食つて来ているのに、子供なんてほんとに——  
春子 もう一つ、はい。

三十女 （急にきげんよく、ベラベラと、しかし、鈍重な取りとめの無さで） どうもこんな子供  
づれで、へへ、置いてこようと思つても、この三人きりで、ほかに誰も居ない暮しでね、へへ、  
ボタン工場に通つていたんですけどね、子供がいちや、やつぱしダメで、靴みがきなんでもやり  
ましたけどね、今度、戦没家族にお金がさがるそうなので、それを元手にして、田舎の兄の家  
で小店でもやらしてもらおうと思つて、まあ相談に行くんですよ、へへ。

春子 すると、御主人は、あの、戦死なすつて——？

三十女 へえ、この子の父親てとですよ。へえもう、ひどい目に逢いました。どうにもこうにもあな  
た、パンスケ稼ぐにしたつて洋服に口紅ぐらい要るでしょ？ なあんにも無くちや、ホントにあ  
なた、手も足も出ない——

検札 もしもし、切符を拝見します。

三十女 ああ？ ああ切符か。ええと、どこさ入れたか——

輝夫 どうぞ。

検札 ……ありがとうございます。

三十女 はい、有つた。

検札 ……これは群馬藤岡までの切符ですが、八高線だから八王子で乗り換えですけどねえ。

三十女 へえ、藤岡へ行くんですけど。

検札 ですから、もう八王子は通過しちまつたんですから、今度の駅で降りて、私がそう言つて

やるから、上りで引返して下さい。もう直ぐ次の駅ですから、急いで。

三十女　へつ？　だつてあんた——そりや！　ええと、これ鉄降りるだ、降りるだ！　なんて、まあ！　こうれ、早くしろ！

（ガタガタと立ちあがり、包みなどをさらいこむ。さわぎに抱かれた幼児が泣き出す）

春子　（見かねて手伝いながら）　これ、たべかけで失礼ですけど、持つてつて下さい。

三十女　へえ、ありが——こうれ鉄、その袋持つだ！　ほら、ほら早くしろ！　なんて、まあ！

（ガタガタと道路を小走りに、幼児の泣き声と共に遠ざかる）

（そのあわてように近くの二三の乗客が大笑——）

四十男　なんてまあ、は自分のことだろう。へへ！

輝夫　フフ、あの調子じゃ、また八王子で乗り越しちやいそうだな。

春子　ほんとに、でも、なんだか気の毒みたいな——

輝夫　なにが！

春子　だつて、子供かかえて、生きて行くだけでヤツト、そんだけで頭の中が一ぱいで、ほかのことは見えないというか——

輝夫　なに、無神経なんだ。当人はそれほどにも感じてやしない。第一、戦争未亡人というのか

らして怪しいもんだ。だつて、上の子はいいけど、抱いていた子は、まだ一年にもならないだろ？ 亭主が戦死したんだつたら、どうしてあんな小さな子が――

春子 それは、しかし、その後、なにか、生活のためかなんかで。

輝夫 とにかく、あんな愚鈍さには僕は同情出来ないな。戦争やその後の社会のために不幸になったということは、それとは別のことだもの。いけずうずうしいというか、あんな人間に食べものなんかやつたつて、結局なんにもならない。

春子 そうかしら。……でも、あの男の子があなた、あんな眼つきでマジマジ見るんですもの、私、たまらなくなつて――

輝夫 せつかく春さんに食べさせようと、十秒フラットかなんかで駆け出したサンドイツチが台無しだもん。ハハ、ちよつと腹が立つたな。

春子 すみません。

輝夫 ううん、そういう意味じゃ無いんだ。

中年男 よいしよ、と（ドサドサと近づいて来て、ガタン、ドシンと荷を置いて）ここ、あいてんだね？

輝夫 あいてます。……（中年男が席に坐る気配、春子に）春さん、こつちの、こんだけ残つてる、食べない？

春子 いいの

輝夫 ……どうかしたの？

春子 ううん。……

(列車の進行の響、しばらくつづく)

輝夫 ……間もなく、こつち側に南アルプスが見えはじめる。じきに甲府だ。……

(列車の響)

傷病者 (すこし離れた所で一種の調子をつけたしやべりかたで) 終戦からすでに六年すべての事が復興いたしました中におきまして、私ども、かくの如き不具の身を白衣に包んで、皆様の前に立つ事は、実に相すまないと存じますが、いかにせん、現在恩給月額四百円では、治療費や薬代はおろか、どうしても生活して行けないのであります。どうかその点を――

青年 (これもかなり離れた、その傷病者の近くで、最初にブツクサ言っていた男) おい／＼い  
いかげんにしねえかよ！ 四百円ずつでももらつてりや、オンの字じやねえかよ！ 相すまないと存じたんなら、もうよせよ。第一法律で禁じてあるんだよ。

傷病 ……(それを聞かないふりで) ……皆さまがたにおきまして御生活のお苦しい中を誠に申しわけがありませんが、どうぞよろしくお願いいたします。

青年 そうよ、お苦しいんだよ、なあ！ こちとらあ、四十円が四円だつて貰えはしねえんだ。職は無し家は無し、しかたが無えから、こうしてカツギ屋かせいで犬のような暮しをしているんだ。そいつから寄付をたかる手は無えだろう。

傷病 かえりみますれば、誤れる軍国主義の指導者にあやつられ、国家のため民族のためと、ただ一筋の愛国の至情に燃え、砲煙弾雨のただ中に――

青年 よせよ、もう――（立ちあがったらしい）おいらだつて召集されて三年間ムダ働きをして来てるんだ。愛国心の一手販賣みてえなこと言うなあ、よせツ！

傷病 私は、なにも無理に寄付して下さいと――

青年 言ってるじやねえかよ！ そうやつて、当てつけがましく義足なんかを、わざとむき出してよ！ チシヨメ、いつまでもよさねえと、この――（手を出しかけたらしい）

中年男 （その近くで）まあまあ、君！

（その他二、三人の人も立つてとめるらしい気配）

輝夫 （こちらで）しようが無いなあ。

春子 なんとか、あの、なんとかならないかしら。

輝夫 どうしたの？

春子 私、からだがふるえるの。

輝夫 馬鹿だなあ。

春子 いえ、あんなこと、なんとかもう少し、政府だとか、そのほかで――

輝夫 どうにもならないんだ。差しあたり。結局金が無いんだな。

春子 だつてあなた、役人でお金を使いこむ人がこんなにいるのに――

輝夫 そらそうだ、たしかに。それを思うと腹が立つてくる。でも、どうにもなりやしない。弱い者はギセイになつて踏み殺されて行く。みんな一人々ギリギリ一杯の所で生きているんだものね、とても人のことなぞ構つちやおれない。下手に構つたりしていると自分まで踏みころされる。それが今の現実なんだ。だつたらイヤだろうと醜くかろうととにかく先ず自分だけは踏み殺されないように、場合によつて人を押しのけてでもとにかく自分の足で立つて見ることなんだな。すべてはそれからさ。

春子 そうかしら？ あたしにはそうは思えないの。そんなことしなければ生きて行けないようなら、私は生きていたく無い。

輝夫 だつて君——今のね、喰つてかかっていたカツギ屋ね、あれだつて相手のことがわからないわけじや無いんだ。わかりすぎてムカツ腹が立つんだ。現に僕だつて同じことだもの。出征して、ちやんと弾きずもある。それがああして連中がわざとキズをむき出しにしてああしてるのを見ると、人ごとならず同情しながら、一方でムカ／＼してくる。歩きまわれるくらいなら、なんかして働いたらどうだと思ふんだな。

春子 輝夫さんは、じや、あの人がかつちへ来ても寄付なんかさらない？

輝夫 しないね。だつて僕の金は僕の汗の代価なもの。もともと僕は作家になりたくて、でもそれでは食えんから、しかた無く今の会社につとめてるんで、そうしてウン／＼言つて取つた金を、そんな甘つちよろい気持で人にやつたりなんか——どうしたの？

春子 ……いえ、私、実は今の人に寄付しようと思つてお金を出しかけていたの。そいで、あなたの話聞いてたら、妙な気持になつて——

輝夫 それにしても、そんな泣きそうな顔したり——  
春子 甘いねえ私つて。

(ゴーツと列車が、トンネルに入った響。しばらくつづき、トンネルを出る)

輝夫 あれが南アルプス。富士もチョツト見えるはずだがな。……間も無く、こつち側に八ヶ嶽のスロープが見え出す。

春子 そう？

輝夫 直ぐにもう小淵沢。連絡の時間がうまく行くといいんだがな。

春子 そうね。

輝夫 どうかしたの？

春子 いいえ、なんでも無い。

(列車の響、それがスーツと消えて行く)

(駅構内の操車の音||箱の連絡のガツシヤン、ガチン、ガチンという音がして、操車係が「おーい！」と呼ぶ声。それにダブつて、コンクリートの上を靴が拍子を取つてパタパタと叩きズーズーと引きずる音)

娘一 クイツク、クイツク、スロウ、スロウ！ クイツク、スロー だあめだなあ！ そこんと



こでさ、こうやつてスツとターンすんだよ！

娘二 こうやんの？ こう？

娘一 そうじゃねえよ、こうして、ほら！ クイツク、クイツク！

中年男 ハハ、テルミちゃん、小淵沢のプラツトフォームがビツクリこいてるべえ。そのぶんだとユメちゃんも、松本のお店に着くまでにや、立派に踊れるようになるかも知れんなあ、へへ。

娘一 だつてさ、まだ汽車が出るの三十分もあるんだもん、間が持てやしないじゃないか。こんなことなら、信越まわりで行つた方がよかつたんじゃない？

中年男 なにさ、こつちから行くと高原列車というやつで景色がいいからよ。

娘二 嘘う！ 向う廻るとヤバイからだろ？

中年男 そうハツキリいうなよ。これというのも、君たちのために思やあこそだ。

娘一 だつてゴロさん、あたいたち一人頭、大三個ぐらい先方から貰えるんだろ。ボロイ商売じゃないかよ。

中年男 そう君、そうあんまりこの、リアリスティキ言うなよ。こいで相当シンの疲れる商売だぜ。ええと、ハル公とトシ坊、馬鹿に便所が長えなあ。

娘二 へへへ、心配なら覗きに行つて見たら？ ハル公が今朝つからしきりにメソメソしてたから、トシ坊同情して、そいで二人がもしかすると、もしかするよ。

中年男 冗談もんだろ、今さらギヤラ踏み倒すなんてえ、ハル坊もトシ坊もニューフェイスじゃ無えだろう。

娘二 ハハハ、テルミ、さあまたおせえて。

娘一 オツケイ。そうだ、このステツプ炭坑節によく合うんだよ。月が出た出た、クイツク、クイツクスロウ、月が出たあヨイヨイとね！

(娘二も踊りながら声を合せて歌う)

中年男 ああ、ハル公とトシ坊、やつと戻つて来やがつた。どうしたんだよう？

娘三 (靴音近づき) なにさあ？ あら、すっかり踊れるようになったじゃないのう！

娘四 ハル公、あすこにいるアベツクね、あれ何だと思う？ 新婚旅行だよ。あれ。

娘三 え、しんこん？ どれよ？

娘四 ほら、あつこの待合の隅にいんだろ？ 黒い服の、とつてもキレイな女の、ほら、こつち

向いた――

(マイクがスツとその待合室の隅に行く。炭坑節は離れたところで続いている)

輝夫 疲れた、春さん？

春子 いいえ。

輝夫 外に出て、あつたかい牛乳でも買つてこようか？

春子 いいの……なんだか、でも、寂しい駅ねえ。こつちの汽車に乗る人は、たつたこんだけかしら？

輝夫 時間がおそいで、土地の人だけなんだな。

春子 あすこで踊つてるの、でも、どういうんでしよう？ あらみんなでこつち見てる。

輝夫 ありや勿論東京からだろう。まあ、田舎の町へくらがえという所かな。あの男が、一種のゼゲンなんだな。

春子 くらがえ？ くらがえというと？

輝夫 そりやね、そうさ、この、そういつた商売の、まあ場所を変えて――

春子 あら、こつちへ来るわ。

(娘達の中の二人が、向うの三人の炭坑節に合わせて低く鼻歌で歌いながら、三四間の所まで近づく)

中年男 (もとの場所からこつちへ向つて) おいおい、もう時間がいくらかも無えぜえ！ え、おい、トシ坊、ハル公！

娘三 (振返つて) なにさあ？ うるさいわねえ！

春子 あら、あの人、私と同じ春子。

輝夫 フフ、年も同じくらいだね。

春子 ……でも、なにね、みんな暗いところなんか無いわね。とても愉快そう。どういうんでしよう？

輝夫 そりや、あんな商売のために暗くなるようじや、生きてはおれんだろう。逆だね。実は暗

い生活をしていながら当人はポカンと明るい、つまり暗くもなり得ない所がホントの暗さだな。  
春子 わからないわ、あたしには。

輝夫 わかつたら大変だ、春さんに。わからなくつて、しあわせだ。

春子 しあわせ？ でも、なぜ私だけがこうしてしあわせで、あの人たちが、あんなふうに、ふしあわせかしら？ 人のことだで、知らん顔ではいられない気がするの。

輝夫 ハハ、またはじまつた。センチメンタル。

春子 センチかしら、これが？ 輝夫さん、お笑いになるけど、私はまじめなの。

輝夫 だつて、いくらまじめに考えても、どうにもなりはしないんだもの。あんな連中の存在には社会に責任があるにはあるが、当人たちも悪いんだ。だつて同じような境遇でもAはああならないでBはああなるんだから――

(マイクがスツと娘たちの所へ行く)

娘一 へつ、身売りに行つてる者もあるし、シンコンレンコンに行く者もありますよ。

中年男 やくな、やくな！

娘三 ネバ、だあれがあ！

娘二 だつて、さあ？ (でたらめの歌) 清い昔が、なつかしやア。

(あとはワヤワヤとさわぎ、それにかぶせて、列車が急な傾斜を登つて行く、汽缶の喘ぐ

春子 ずいぶん急な坂になつてゐるのね？

輝夫 うん、登りつめると、たしか海拔三千尺の上なんだ。ほら富士さんが見える。

春子 あら、こつちになるのね。まあ、綺麗。

輝夫 夏になると、この辺一帯の高原、まるで眼がさめるようになるんだ。

春子 ああ、白樺が、あんなに！

輝夫 景色をながめながら、今のうちに夕飯を食べとこう。春さん、サンドイツチろくに食べなかつたんだし、おなか空いたろ？ それに向うに着くと相当歩くからね。

春子 はい。あの、そつちのバッグ、ちようだい。（バッグを開いてベントウの包み紙をあける）

お茶は、あのう——

輝夫 はい、これ（水筒のセンをポンと抜いてついでやる）……やあ、向うでは酒が始まつた。

さつきの連中。（その前から車室の向うの隅で娘たちと中年男がはしやぐ声）

春子 はい、どうぞ。

輝夫 ……（食べはじめ）こいつは、うまい。春さんこさえたの？

春子 （これも食べつつ）ううん、姉さん。のり巻き姉さんのお得意なの。以前、名人のすし屋さんにおそわつたんですつて。

輝夫 道理で。うまい、ホントに……だけど、良い姉さんだなあ。姉さんというよりはお母さんだね君の。つくづくそう思う。未婚の学校の先生などしている人のようじゃ無い。

春子 （食べながら）未婚じや無いのよ。若い時分、一度結婚したことがある。父や母がまだ生きてた頃。私はまだ小さくつて何もわからなかつたけど、うまく行かないで、直ぐに戻つて来たの。

輝夫 そうかなあ。しかしそりや、その相手の男の人が、なんか悪かつたんだよ。そう思うな、姉さん見てると……（食べつつ）だけど、今日はとうとう見送りには来て下さらなかつたね。

春子 わざと来ないの。ドキドキして駄目なんですつて。今ごろはきつと学校の窓の所で私たちのことばかり考えて、祈つてる。

輝夫 祈るといふと？

春子 そういう癖があるの、フフ。今朝早く起きて、このノリ巻こさえながらね、お姉さん、私になんといつたとおもいます？

輝夫 なんていつたの？

春子 フフ。

輝夫 なに？ え、どんなこと？

春子 あのねえ……結婚ということは——はずかしいから、いわない。

輝夫 いいじゃないか、いつてくれたつて。

春子 あとで、あの、姉さ——（言いかけて、不意にクククとせぐりあげて泣き出す）

輝夫 どうしたの？ え、どうした？ 春さん、どうして、そう急に君？

春子 いえ、なんでも無いの（泣く）

(向うの隅の娘たちが酔つて歌い出した炭坑節が大きくなる)

中年男 (その歌声の中で、酔つていたけだかに怒鳴つている) やいハル公、お前なんかな、どんなフテエ量見でついて来ているのか、おらが知らねえと思つてるのか、やい!

娘一 酔つぱらつて、又、からむよゴロスケは! そんなことより歌えよつ!

(あとはワヤ／＼と歌になり、遠くなる)

輝夫 ……ほんとに、どうしたの、春さん?

春子 ……のり巻見ていたら急に姉さんのこと思い出して——なんか不意にたまらなくなつて

輝夫 いいよ、いいよ、そりや。しかし出しぬけだからビツクリした。

春子 すみません。……それにね、最初一緒に乗つていたおかみさんね、それから傷痕軍人の人

——あれこれいつしよに思い出して———そいから、あそこの、ああしてお酒のんでさわいでる、あの人たち、みんな、一ぺんに悲しくなつて。

輝夫 いや、春さん敏感になつてるしね、いろいろ刺戟が強過ぎるから。

春子 こんなことでは、しょうが無い。そう思うんだけど。

輝夫 いいんだよ。ただねえ……

中年女 へい、ごめんなして、ちよつくら通してくだせえ。ごめんなして。

老人 やあ、おとめさんのおかみさん。どこさ行くかね？

中年女 こりや坂本さんのお旦那でやすかね？ へい、今日は内のをナカゴミの病院さ見せに、こうして。（連れの夫に）あんた、そら、坂本さんのおやじさまだ。

中老 今日は、へへ、へへ、ありがとうございます。へへ。

老人 やあやあ。どうだや、お旦那？（中年女に）おとめさんも大変だのう、どういふ加減だ近頃？

中老 ありがとうございます。へへ、へへ。

中年女 ありがとうございますよう。なに別に悪くもならねえけんどね、毎年今ごろになると気がたつてよくねむれなくなるんで、一度お医者に見てもらつところと思ひやしてよ。

老人 そりや、まあ。ああ向うに、並んで坐れる所があら、あつちが、ええずら。

中年女 へい、ありがとうございます——さ、お前さま、こつちだ。（言いながら通路を向うへ行く）

中老 ありがとうございます。へへ、へへ。（これもそちらへ遠ざかる）

春子 （ひどくびつくりした、しかし小さな声で）あら！

輝夫 なに？

春子 あれ！ あれごらんなさい。あの繩！

輝夫 ああ。……ふうん。

春子 どうしたんでしよう？

老人 ハハ。（淡々とした問わず語りの調子で）あの夫婦は外を歩く時にや、いつでもああして、からだとかからだを繩でしばりつけて歩きやすよ。旦那の方が四五年前から頭がおかしくなつてね。



いや、畑仕事はチャンと出来るし、別に乱暴なぞ何もしねえ、ただ外に出るといきなり駆け出したりして、あぶねえからねえ、あのおかみさんの知恵だ。よく出来たおかみさんでなあ。

輝夫 そうですか、そいつは。

中年男 (わきから話を引き取つて) 感心なもんだねえそいつは。だけど、御亭主はまた、どうして気がふれたのかね、見たとこ、ニコニコして、おかしな所は無えようだけんどね。

老人 人の顔を見れば、ああして、ありがとうをいうだけでね。ハハ、しんから、あれで、ありがたく思つてるんだから、しかたねえずら。

中年男 おかみさんのことをかね？ つまり感謝してる？――

老人 いやいや、はじめから話さねえとわからねえが、あの仁はズーツと、そうさ二十年の上になるべし、この下の小作をやつて来て、うん、良え百姓だ。ただいろいろ仕合せが悪くつて貧乏でな、それがお前さん、戦争すんで農地改革つうで、田地もらつて、つまり自作農になつたと思いな。うれしくて、うれしくて、こいつは百姓永らくやつたもんでなきや、わからねえずら。とにかくありがたくてうれしくて、その頃から、少しずつおかしくなつていただなあ。

中年男 へえ、そうかねえ！ ふうむ！

老人 間も無く、こんだ自作農になつただから税金がドカツとかかつてきた。これでお前さん、たまげて、カーツとしちやつていよいよ、いけなくなりやした。もともと、おそろしく気の弱え仁でね、それが今言つた、煮湯をあびせた後で水の中に突つこまれるような目に逢つたわけ。

中年男 へえ。かええそうになあ。これで、農地法は良えことだつていう向きが多いが、中にやそんな目に逢つた人もいるんだな、もつとも税金の事あこりやまあ、誰にしたつて頭あ痛めてら

あ。

老人 さようさ。こんでわしらなぞも税金月になると、いつそ頭あ狂つちまいてえと思うことがありやすよ、ハハ。

中年男 するてえと、しかし、あの夫婦は一生縄でつながつて墓場まで行くというわけか。

老人 それも、考えようだ。どこの夫婦でも、こいで、目には見えねえが、互いに縄でしぼられてるようなもんだし。

中年男 まつたくだあ、そいつあおいらなんぞ、古女房のシワクチャ面あながめていて、こいつしまつた、六十年の不作だわいとクソいまいましてくなる事があるども、自業自得で、これ、どうにもしやあ無えさ。へへ、へへ！

老人 ハハ、ハハ。

輝夫 どうしたの、春さん？

春子 ええ……いいえ。

輝夫 ほら見たまえ、あれが赤嶽だ。向うのスロープは、たしかズーツと牧場になつている。

春子 そう？（うわの空）

輝夫 よしたまい、あの人たちばかり見るのは。

春子 でも、どんな気持でいるんだろうと思ふの、あのおかみさん。

輝夫 だからさ、だから……とにかく、もう間も無く着くから、仕度しなくちや。

春子 ええ。

(二人の会話を圧して再び娘たちの炭坑節がおこり、その尻にかぶせて汽車が停車場に入つて停車するエフエクト)

輝夫 さあ、着いた、ここだよ！ ポストンバツグは僕が持つから、春さんそつちの袋だけ持つてくれりやあいい。さ！

(通路を歩き出す)

春子 (これも道路を歩きつつ) ええ。

娘一 あら、シンコンレンコン、ここで降りんのう？ (酔っている) はばかりさまあ！ 焼けるよつ！

娘二 (でたらめの歌) 二人で歩いた白樺の、森の小道のスマレ花。バイバイソーロン、心中なんかすんなよ。仲良くやれよ。

娘四 へつだ！ シンコンレンコンがなんだい！ ろくな事あ無えぞ、よせよせ！ 結婚は恋愛の墓場なあり。

中年男 (ひどく酔っている) なあ、チシヨウメ！ ゴロスケ、ゴロスケなんどと、人の事お安くなめやあがつて、へつ。

(この辺からマイクは、この人たちを離れて輝夫と春子を追う)

やい、ハル公、便所からでもどつからでも逃げられるもんなら逃げて見ろい、クサレあま！

娘三 おうよ！ おらたちは、どうせしまいにや病気で腐つてしまうんだ、それがどうしたよつ！

中年男 なあにようつ！（ビシツと頬をなぐつた音）

娘三 よくもなぐつたな！（もう一つビシツとなぐる音）

春子 あつ！（既にプラツトフォームを歩いている）

輝夫 馬鹿な奴等だ。救えない……

（ボーツと汽笛が鳴つて汽車が動きだす。そのエフエクト……それが遠ざかつて行く）

輝夫 さ、出よう。（歩いて改札口を出る）

春子 （それに従いながら）ええ……

輝夫 ええと……叔父さんまだ来ていない。いつとき待つか。疲れたる？

春子 ううん。

輝夫 今ごろになると急に空気が冷えて来るんだ。その茶店に行こうか？

春子 いいの、ここで。

輝夫 それとも、上の林に行つてみようか、ちよつと良い気持だよ。行こう。

春子 ええ。

輝夫 どうしたの？ また――

春子 いえ……行きます。

輝夫 （ザクザクと砂利の上を、あるいて）ちよつとお願いします。このカバン二つ、いつときあずかつてくれませんか。

茶店女 はい、ようござんす。

輝夫 もし、六十ぐらいの白いヒゲの老人がここへ来て僕をさがしているようだったら、上の林に行つてるからといつてくれませんか。輝夫というんです僕は。

茶店女 輝夫さんというんだね？ 承知しやした。

輝夫 たのみます。……（歩き出す）春さん、こつちだ……。

（春子が黙つて従つて行く足音）

ほら、直ぐ林だ。遠くからだど、枯木みただけど、近よつて見ると、もう芽をふいてる。

（林の小道に入り足の下で枯れ小枝が踏まれてピシピシ鳴る）

輝夫 やつぱり疲れたね？

春子 いいえ。

輝夫 じゃどうしたの、黙つてしまつて？

春子 ううん、いいの。

輝夫 いやだぜ、又泣き出されたりするの。

春子 フフ。

輝夫 ……ごらん、あのほら、あつちが横嶽なんだが、もう真つ黒になつちまつた。あつちの空は、あんな綺麗な薄桃色だのに。

春子 ええ。

輝夫 坐ろう、このへんに。ここが良い。(コートをぬぐ) 僕のコート敷いて——そうだな、寒そうだから、いつそ着た方がいい。そら。

(二人、落葉の上に坐る)

春子 でも輝夫さん、寒かない？

輝夫 いや僕は平気。……静かだねえ。……

(どこかで澄んだ小鳥の鳴声……間)

春子 ……あのね輝夫さん。……私のいう事、きいて下さる。

輝夫 え、なんだよ？ 又——

春子 いえ、もう泣いたりはしない。私、本気なの。

輝夫 ……なんだろう？

春子 私……ここから東京へ帰る。そうさせて。

輝夫 え？ すると、叔父に逢わないで、直ぐこのまま——どういう、それは、そんな——

春子 あたし、なんか、自信なくしちやつたの。いえ自信というとなんだけど、どういふんでしよう？ こんな気持で叔父さんにはお目にかかれない。

輝夫 だから、叔父を怖がる必要なか無いと、あれほど——

春子 いえ叔父さんが怖いというより、叔父さんにお目にかかれば、スツカリまあきまつてしまふんでしょ？ それが——

輝夫 だつて、僕たち、それをきめるために、此処へ来たんだろ？ 春さんだつて、それ、きめたいと思つて——

春子 ダメなような気がするの、それが。……あのねうまくいえないけど、私、あなたと一緒になつて、この先ズーツとうまくやつて行けそうに無い。そんな気がしたの。怖い。

輝夫 ……すると、なんだろうか、それは、僕との事は、もうこれつきりにしたいという意味なの？

春子 いえ、東京へ帰つて、もう一度よく考えて見たいんですの。叔父さんにお目にかかれば、もう取返しがつかなくなるから——

輝夫 (怒つて) 取返しがつかなくなるんだつて？ そ、そんなふうには春さんは——？ まるで僕が無理じいに婚約させようとしてもしてるように——

春子 いえ、そうじや無い、そうじやないんですの。そうじやなくて、私という人間が、まだ駄

目なの、ホントに、ホントウに駄目なの。だから――

輝夫 そんなことは絶対に無い。なんか君は病的に敏感になつてるもんだから、自分だけでむやみと自信をなくしているんだ。仮りにそれが当つていたとしても僕は、僕が、そういう君を好きで、こうしてなにしたんだから、それでいいんだと思う。ね、そんなこと言わないでくれ。

春子 ありがとう。ホントにありがたいと思うんだけど……このまま帰らして。おねがい。

輝夫 ……（弱りきつている）どうして、しかし、今日になつてそんなこと言うんだらうなあ？

春子 今日わかつたの、自分が駄目だつてことが。まだ一人前の人間として、とても結婚生活なんか出来るような私は――

輝夫 すると、ここまで来る途中いろんな人を見たりした。それがそんなふうには君に思わせたの？ すると、どれが、どんなふうには――？

春子 どれが、どんなふうにはと言えないの。一つ一つの意味は私にはわからない。だから怖い。おそろしい。（非常に弱っている）

輝夫 しかしそれは世間馴れない君が、不意に旅に出て変つたことを見ききして、自分でもしらないで誇張して感じているんだと思う。

春子 そうかも知れません。でも、そうなんだから、しかた無いの……実はさつき、汽車の中で、お酒のんでる女の人たちと、縄でしばりつけた夫婦の人、見ているうちに……急に私、死にたくなつたの。

輝夫 （相手の幼児のような弱りこみかたに自分も全く弱つて、既に相手を説得する調子よりも一人ごとのように）……そりや、今の世の中が荒れ果てているということなんだな。戦争からの



キズが、あつちにもこつちにも口を開けて残つて……たつた五六時間の汽車の旅の中にだつて、それで、君と僕との間にさえ、そいつが割り込んで来る。……そういう時代なんだ。……春さんの気持も、ちつとはわかるような気がする。……（間。白樺の林をあまり強くない風がサーと渡る音。どこかで鋭い小鳥の声）そう、このまま帰つてもいいよ。

春子 ……（低く泣いている）

輝夫 しかしね、僕が君をシンから、なにしているということは忘れないでくれ。僕はいつまでも待つている。

（そこへ不意に、下の方の遠くから、枯れて良く透る老人の声が呼ぶ）

声 おーい！ 輝夫おーい！ 輝夫よおーい！

輝夫 ああ、叔父さんが来た。……どうする？ 逢わないで帰る？ それだと、なんとかしないと、こつちへ来る。

声 おーい！ 輝夫よおーい！ （ユツクリと少しずつ近づく）

輝夫 春さん、これだけ聞かしてくれ。君は、なにかしら、僕のこと、ホントにこの、なんだろうか、愛してくれてる？

春子 ええ。（涙声）

輝夫 ほんと？

春子 だから、こうして来たの。

輝夫 (押しかぶせて) そんなら、そんなら君、いつさいがつかい、僕にまかせてくれ。ね!

それさえお互いにハツキリ、その点さえ二人がしつかりしていれば、どんなものが割り込んで来ても、なんとかなる! 僕がやつてみせる、ね春さん! 愛さえあれば、ホントの愛さえあれば、あとはなんとかなる。怖いだろうけど、その怖いものぐるみ僕におつつけて、根こそぎ僕にまかせてくれ! 僕はもう、こうなつたら、君がいなければやつて行けそうに無いんだよ。

春子 ……私も、そうなの。私も――

輝夫 そ、それなら問題ない! 叔父に逢つてくれ、くれるね? こつちへ来たまい! 馬鹿だなあ、何をそんなにふるえるんだ?

声 (近づく) 輝夫おおう! どこだあよう? おーい!

輝夫 さ、行こう。怖いことなんか無い、とてもノンビリした爺いだよ。

春子 (声がふるえている) すみません。(肩を抱かれて歩きながら) お姉さんがね、今朝言つたの……結婚というものは、とても、とても良いもの。そう言うの。良いもの。……だから、姉さんがそう言うんだから、まちがい無いから目をつぶつて、とびこみなさい。全部、輝夫さんにまかせて――(まだ声がふるえている)

輝夫 そうなんだ! 姉さんの言う通りだ! ハハ、とびこむんだ! そうなんだよ。

声 輝夫よおおう! どげえ、いるだあ?

輝夫 (叫ぶ) 叔父さあん! こつちだ、こつちだ、いま降りて行きまあす!

(その二つの叫び声が近くの山々にカーンワーンとこだまして消える)

## 作者の言葉

### 初 旅

現代に生きていて、「幸福」という事を考えると、実にむずかしい色々の問題が出てくる。

自分というものから切り離れた形で、社会全体の幸福を観念的又は理想主義的に考へて見るだけならば、まだ比較的容易だ。それは多分高度にシステムテイクに合理的に構築された社会主義体系のようなものになるであろうと思われる。又逆に、自分を社会というものから一応切り離れた形で、つまり自分だけの個人的な幸福を考えることも比較的やさしい。

しかしその全体の中に自分というものを持ちこんで、その生きた自分と社会全体とを一緒にして、そこから生まれる幸福を具体的に掴みとることは実に困難である。

人は誰しも本能的に幸福を追求する。利己的で想像力を欠いた人は自分一身の幸福の追求だけで満足するだろう。しかし利己的でない敏感な人は自分だけが幸福になつても幸福だとは感じないだろう。そして現代人として真の人間性に目覚めた人間は、多かれ少かれ利己的ではないし、そして敏感である。周囲の状態に完全に盲目ではあり得ない。しかも、それでいてやつぱり幸福にはなりたいたのである。しかも社会全体が幸福になるであろうズツと先きまで待つてはおれない

のだ。真の困難さはここに在る。

そういう課題に向つてこの作品は書かれたものである。

戦争というものは、現代の不幸の縮図ということが出来るだろう。しかし戦争の最中は人々は昂奮し激動してために不幸は充分には意識されないで過ぎる。戦争後、ことに敗戦後の敗戦国民にとつてはすべての不幸が意識して感じられる。しかもしばしばそれは誇張して感じられる。そして、その最も強く感じられる場所は、人々がやむを得ずして密集している場所である。

現にわれわれは敗戦直後の汽車の中で、それを一番強く感じて來た。その中で押しもまれながら個々人は生きなければならなかつたし、そして生きなければならぬとあれば自分は如何にすれば幸福であり得るかも考えざるを得なかつたのである。

『初旅』の中で新婚の二人に託している種々の印象や思いは、結局は私自身が実際において何度も何度もそういう場合に感じたり考えたり考へたりした事の一部である。ここに描いたあるエピソードの一つ一つも、実際に私自身がぶち當つた事件が多い。

課題に対する答えはここに持ち出されてはいない。しかし私自身は答えが在り得ないとはおもつていない。

一九五四年十一月記

三好十郎

底本.. 「ラジオドラマ新書 破れわらじ」 宝文館

1954 (昭和29) 年12月25日第一刷発行

初出.. NHKから放送

1952 (昭和27) 年4月

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2011 (平成23) 年5月25日